

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

87

2003.6

- 研修生レポート . . . P.4-5
- フォローアップレポート . . . P.6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp
URL: <http://www.kisweb.ne.jp/phd>
定 価：100円



山の斜面いっぱい広がる茶畑。
黙々と茶を摘む女性たち。
ここネパールの東部、
イラム地方は国境をはさんで
インドのダージリンのすぐ近く。
良質のお茶の産地。
茶摘みの仕事の
1日のノルマは80kg。
そして50~60ルピーの稼ぎ。
町でお土産に買った紅茶は
1キロで800ルピー。
誰のところに儲けがいくのか。
生産にかかわる人は分が悪い。

(1ルピー≒約1.6円)

ネパール、イラム 撮影 FUJINO T.

東西南北 問題解決 取組日記

国内の人づくり

3月△日

相次いで二人の若者の相談に乗った。一人はこの4月で4年生となった現役学生、もう一人はこの春大学を卒業している。どちらも男性。二人とも将来、国際協力に関わりたい、そのためにはどうすればいいかと言う。どうしてそう思うのか、何のためにそうしたいのか、自分に何ができそうか、したいのか、それに向けて何を準備してきたかといった事を別々に質問した。二人とも真面目で、それなりに考えているのは伝わってくるのだが、希望と今の自分の段階とのギャップが大きい。希望を実現するための段取りがはっきりしていないように感じ、各々にPHD協会で修行してみたらと勧める。NGOというものがどうまわっているのか。国際協力の現場とはどんなものなのか。政府系と民間の違いは。自分に足りないものは何かを事務所に出入りすることで学ぶことを提案した。2ヵ月経った今も二人とも週1~2回通ってきている。国内での人材育成については以前から力を入れていくことを方針としているが、こんな形もある。彼らの思いもいづれこの会報でお知らせしたい。

お金をもらう関係ではなく

3月□日

パプア・ニューギニア (PNG) にでかける。昨年訪問の予定だったが、カウンターパートの団体の事情で延期されていた。

今回は、これまでの出張では訪ねることのなかった国際協力事業団 (JICA) 事務所で斎藤所長、島本専門家とお互いの情報を交換した。島本さんはPNGに行かれる前からPHDの会員。今は首都のポートモレスビーの低所得者層の人々への支援を担当しておられる。インフラ重視のプロジェクトでは、PHDとの話の共通項はないが、人に働きかけるものでは、互いの経験がヒントになりうる。今回は、現場を見る時間がなかったが、次回

は是非。

また、斎藤所長からの話で、米の増産支援に力を入れていることを伺った。これまでに日本に迎えたPHDの研修生の多くが農業、しかも有機農業を外から持ち込むものを少なくして行っていることを説明した。将来、何かの接点ができる可能性を感じ、モロベ州フィンチャーフェンに入った。そこで、研修生ハリエオさん (97年度) が、州の米栽培の取組みに関わっていて、それをJICAが支援しているという。事務所で聞いた話が、もう具体的に動いている。PHDの研修の成果が研修生個人だけではなく、広く地域に広がるためには、行政との連携も意味がある。

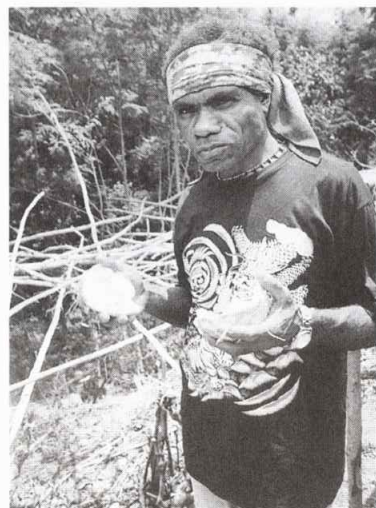
帰国したところ、以前PNGの研修生もお世話になった元寝屋川淡水魚試験場の矢田敏晃さんから連絡があった。この春からJICAのシニア隊員としてPNGへ指導に行かれるという。任地はPHDの研修生の住むところから少し離れているが、行き来できない距離ではない。ぜひこの夏に、私たちのスタディツアーの期間に研修生を訪ねて下さるようお願いした。

協力を携わる同業者として、政府系の皆さんとも交わることで得られることも多いと思う。

さようなら、レルさん

4月×日

フォローアップと新しい地域の調査でネパールへ出かける。首都カトマンズに着いてすぐ、神戸からの連絡が届いた。つい1ヵ月前、出会ってきたパプア・ニューギニアの研修生レル・サバさん (90年度) が亡くなったとの知らせ。以前より呼吸器疾患があり、時々入院することもあった。しかし、1ヵ月前に明るい顔で、これからの計画を話してくれていただけに、驚きととても残念な気持ちで一杯になった。この夏にまた訪問するので、彼の気持ちを引き継いでくれることを村の人々をお願いしていききたい。



レル・サバさん (03年3月13日)

もっと会員を!

5月○日

決算理事会が行われる。年度末には単年度赤字を300万~400万と予測したが、2、3月のご寄附が伸びて、190万の赤字に留まった。とはいえ、赤字は赤字。決して喜んでいられない。理事会の中でも説明したが、新年度は収入科目の中でも会費収入増に力を入れることの必要を全体で確認した。既に会員になって下さっている方々の継続を基礎に、新しい会員をどれだけ増やすことができるか。02年度決算額は774.5万円に留まったが、目指すはまず900万円。

財団法人はもともと、基本財産の運用益で事業を行う法人である。しかし、この低金利では、ろくろく運用益が出ない。世界の富の分配を考えた時、財テクで稼ぐ存在を認める経済体制こそ見直すべき構造と気づきながらも目の前の仕事としては、利息の高いものを探すこの矛盾。だからこそ会費によって支えられる体制にしたい。そのために支持をいただける活動と、それを伝えるメッセージを発信しなければと思う。

税金をどこからとるのか

5月×日

やっと特定公益増進法人の更新認定の通知が届く。1月半ばにメドがたちましたと兵庫県担当から連絡を受けてから4ヵ月。この認定はPHD協会への寄附額を個人は所得税、法人は法人税の課税対象額から引くことができる。要するに、寄附分が免税の対象となるものだ (詳しくは8頁に)。当会の活動がそれにふさわしい内容であることを兵庫県、更に言えば財務省が認めてくれるもの。

一方で、公益法人全体に収支の黒字分に課税しようという動きが検討されている。会員、協力者の会費、寄附中心で、地道にやっていると、そうではないところがひとくくりの扱いには大いに異議がある。NGO/

NPOの仲間との勉強会で対応策を検討している。

5月☆日 ネパールスペシャル

カトマンズの経済活性の理由

昨年8月のネパール訪問時にも感じ、85号でも報告したが、不景気といいながらカトマンズの町が派手だと感じる。今回の滞在中、町の変化について興味深い話をいくつも聞かせてもらった。

国王暗殺事件やマオイスト (共産党毛沢東主義者) の活動から治安が安定せず、有力な外貨獲得手段であった観光が振るわない。海外からの客は相変わらず少ないまま。にもかかわらず、町の雰囲気は暗くない。新しい店も多い。誰がこの経済を支えているのかといえば、昔からの地主層、汚職で稼ぐ役人、海外の傭兵帰りに加えて最近では海外への出稼ぎ者が増えたことが大きいという。その数は150万人にも達する勢いで、彼らが送金する、もしくは持ち帰るお金がネパールの経済に大きく影響を及ぼしている。国内産業ではなく外からの収入がカトマンズだけに持ち込まれ、この資金が経済、消費文化のグローバル化をカトマンズにもたらしめている。例えば若い女性の服装もサリーやパンジャビドレス一辺倒からジーンズなどが見られるようになってきているし、車もかつての日本の中古車ばかりの状況からインドや韓国製の新車が行き交うようになっている。しかしこれはカトマンズに限ったことであり、それ以外の地域の様子は全く異なる。

ネパール4つの格差

今、ネパールには4つの大きな格差があると村落開発に関わる友人が教えてくれた。一つ目は貧富の差、二つ目はカーストによる差、三つ目はジェンダーによる差、四つ目はカトマンズとそれ以外の差だということ。カトマンズの表面だけを見れば気づかない。しかし、この4つによって多くの人々は困難な状況にあり、武力を用いることで怖れられながらもマオイストの勢いがおさまらないのは、彼らの主張が必ずしも外的外れではないからだ。貧しい人たちはマオイ

ストに奪われるものではなく、持っている層が彼らを怖れることになる。武力でコトにあたることに賛成はできないけれど、彼らの主張の根本は理解できると友人は話してくれた。マオイストのリーダーの一人であるバブラム・パタライ氏は実は大変なエリートであり、高等教育を受けた優秀なエンジニア。お連れ合いもエリートの家系。現在の武力路線のままでは、最終的な解決が困難であることは読めていて、路線の転換が早晚あるかもしれないとの見方も聞いた。

90年に複数政党体制に移行したが、それが必ずしも草の根の人々の意見の反映に結びついていない。以前のままの地主層の利益を守り、またそこに寄生する役人による腐敗政治の横行。この構造を変えていかないとネパールが抱える多くの問題の解決にはならないと感じる。海外に出るチャンスがある人ばかりではない。出られない人には出られる人への不満が出てくる。

キャビン・ハウス出現から思う

いつも泊る宿で働く青年にキャビンハウスと呼ばれる水商売のお店が増えてきている話を聞き、二人で近所を歩く。ここは海外観光客はあまり来ない、地元の人向けの商店街。その通りのあちこちに喫茶店というか食堂がある。中に入ると狭い店内を、細かく仕切られていて、二人ずつが並んで座れるイスとテーブルがある。並んで女性がついてきて、飲食をする仕組み。普通の飲食店の3倍程度の値段に女性の分も上乘せされる。

話がまとまれば店外で、その先もあるという。決して安くはなく、先述のお金を持っている人たちが客だという。海外で遊びを覚えた人たちのニーズに応える形にもなっているのだろう。これも一種のグローバルイゼーション。初めてネパールを訪ねた81年には、こういう商売はネパールには極めて少ないと聞いていたが、こういう変化もある。

驚いたのは、そのお店で働く女性の一部に学生がいるということだ。自宅からの通学ではなく、地方からカトマンズに出てきた学生が親の送りだけでは足りない。学費、生活費は仕送りではまかなうとしても、町に住めばお金が必要となる状況に出くわす。店に並ぶ多くの商品の誘惑も強いに違いない。それを手に入れるための収入源、働き口は日本のように存在しない。だからここで働くことになるのだという。より良い生活を手にするために教育が大切だと親も思い、本人もそう考えて、町に出る。そこでこういうことになるとすると、この「教育」とは何だろうと思う。またこういう仕事を成り立たせる経済の有様。カトマンズの経済の活性化にプラスになっていることには違いないのだが。

少し前にはカトマンズから少し山に入った村の女性がインドの売春施設に売られていく問題を聞いた。この場合は、本人は望んでその仕事に就くわけではなかった。今回のキャビンハウスは、本人の意志があり、お金が必要な理由のレベルが異なる。日本の援助交際にも似たものを感じる。外と交わることが良い結果をもたらすとは限らない。知らないで損することもある。知らないままの方が良いことだってあるかもしれない。バランス良く知ることの難しさを感じる。どこまで知れば良いのかという設定も難しい。善かれと思って働きかけることだって、逆に作用する可能性もある。

教育とか国際協力は、実はとても話がまとまれば店外で、その先もあるという。決して安くはなく、先述のお金を持っている人たちが客だという。海外で遊びを覚えた人たちのニーズに応える形にもなっているのだろう。これも一種のグローバルイゼーション。初めてネパールを訪ねた81年には、こういう商売はネパールには極めて少ないと聞いていたが、こういう変化もある。



ケバケバしさはない。コカ・コーラやペプシのペイントが特徴のよう。

織細な扱いを必要とする分野だとつくづく思う。何のためのどんな教育なのか。これは貧しい地域の人々に当てはめて考えるだけでなく、日本の中でも考えなければいけないことだ。目の前の必要を満たすことも大事だけれど、少し先のことも考えられる教育だったり、国際協力でなければと思う。

総主事代行 藤野達也

20期生 「まずは自分が頑張る！」 フィリピンC.O.研修旅行報告

20期生の3名は、3月7日に日本を発ち10日間アンディさんの出身地域であるガバルドンにてサフルディ（PHDのカウンターパートNGO）による地域組織化（Community Organizing）の実践を学んできた。それぞれの村へ元気に帰ってきました。

現地で30年以上試行錯誤を繰り返しながら生活改善へ向けた住民組織化を行ってきたサフルディの活動分野は、有機農業、フェアトレード、保健・栄養、環境と多岐にわたります。それぞれのグループのメンバーから活動の歴史、工夫、問題点などを聞いた20期生の感想は一。

「有機農業でやっている田畑を定期的に他の村人たちに見に来てもらい、その効果を説明するやり方は是非自分の村でもやりたい」とスウェウィンさん。「村の婦人会の活動内容を

変えたい。今はお菓子を作ったりするだけ。もっと村の問題を話し合ったり、一緒に離乳食を作ったりしたい」とミミさん。「前の研修生や友達と話し合う。できればタイにあるNGOとつながって農作物の販路をひろげたい」とスラチさん。3人に共通するのは「まずは自分が日本で勉強したことを村でうまくできるようになることが一番大事」という点です。

彼らの帰国後の活動を皆さんと共に応援していきたいと考えています。



保健プログラムで実演するヨリーさん

しています。販売用の米や玉ネギには農薬、化学肥料を使わざるをえないのが現状。ヤギ8頭、水牛2頭、鶏12羽を飼っています。

昨年からは村の自警団の一員になり、時々村内のパトロールをしたりしているそうです。



ミノさん一家、全員集合

ヨリーさん（93年度短期）
最近サフルディの有機農業と保健衛生プログラムにボランティアとして積極的に関わっています。今回のツアー時にもほとんど毎日私たちに同行し、色々と説明してくれました。

生ゴミと水牛の糞を混ぜて堆肥を作り、伝統品種の稲作に使用。平日の午前中は村のDay Care Center（保育園）で働き、午後や週末は農作業で忙しくしています。

帰国研修生短信（その1）

エディさん（99年度）

毎年1～4月は乾季で雨が少ない時期ですが、今年は特に降らず水不足が深刻。山の上にある畑では一切農業ができず、家でも水の確保に苦労している程でした。稲作では逆に昨年洪水に見舞われ収量は例年の半分。エディさん曰く「世界的な異常気象がここにも」。

雨季が来たら色々な野菜や稲を有機栽培し、12月頃には村の中心地に販売所を作るのが今年の目標です。



スウェウィンさんと農業技術の教え合いをするエディさん（右）

ミノさん（96年度）

雨季の稲作では3種類の伝統品種を有機栽培で主に自家用として作っ

研修生レポート

21期生

来日している2名は順調に6週間の日本語研修を終え、5月末からは現場研修に入りました。アンディさんは稲作、野菜、養鶏に関する有機農業を、エルリナさんは保育や洋裁を研修しています。

<滞在家中>

小林達彦さん・洋子さん宅（神戸市北区）



ホストファミリーは初めての小林さんですが「実際アンディさんを受け入れてみたら全く違和感がありません。とても自然に意思表示をしながらも私たちの生活にすっかり溶け込んでいます」とのこと。

食事が心配だったというお母さんは「今のところ納豆以外は何でも食べてくれるので大変助かっています」。「もし僕が30歳の時に彼に会っていたら（仕事や人生に対する）考え方が変わっていたかもなー」と話すお父さんは、「ドアの開け閉め、階段の上り下りでの丁寧な身のこなしや、早寝早起き、暴飲暴食をしないなどの生活習慣を見て、こちらが見習わなくてはいけないことがたくさんです」と感想を述べて下さいました。

エルリナ（通称エリ）さん （インドネシア、女性、29才、イスラム教）

西スマトラ州ソロ郡タベ村から5人目の研修生です。タベ村は州都のパダンからバスで3時間程内陸部に入った山村。標高約1100mに位置するため、平均気温が約20℃と年中過ごしやすい気候です。

タベ村は5つの集落から成っており総人口約2500人。電気は97年から少しずつ広がり、例えばTV12台、DVD8台という状況です。エリさんの家には4月に電気がきたそうです。主な生活用水は井戸水で飲用には沸かして使います。洗濯や水浴びなどには雨水も利用します。

4月9日にアンディさん、10日にエルリナさんが来日してPHDの新年度が始まりました。ビルマからの研修生ケンターウェさんは、5月中旬ようやくパスポートが取れ、早ければ6月下旬～7月上旬の来日予定です。

アレハンドロ・スミブカイ・バナ （通称アンディ）さん （フィリピン、男性、31才、キリスト教）

ヌエバエシーハ州ガバルドン、パゴシカット村出身。今までは近隣の村からヨリーさん（93年度短期）、ミノさん（96年度）、エディさん（99年度）を招いてきました。

パゴシカット村はマニラから北東へ約140km（直線距離）、バスやジプニー（乗合バス）を乗り継ぐこと約5時間。人口は約2500人/530世帯。電気は84年からきており約8割の家にテレビがあります。アンディさんの家にもテレビ、ステレオ、洗濯機など色々な電気製品があります。生活用水は井戸水でそのまま飲めます。調理には、薪、炭、プロパンガスを使い分けています。

この地域は稲作と玉ネギの一大産地。中国系の商人や仲買人が種、農薬、化学肥料の販売や農作物の買い付けを独占していることや農薬、化学肥料の使い過ぎによる土壌の悪化、水質汚染などが大きな問題です。

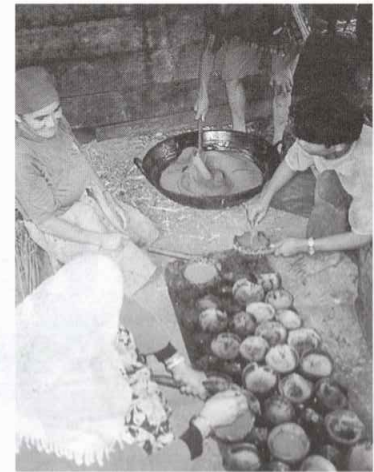
アンディさんは両親と妹の4人家族。米、玉ネギが主な換金作物、あとはトウモロコシ、ピーマン、豆類などを自家用に作っています。耕作用の水牛2頭、ヤギ7頭、鶏20羽程を飼っています。99年からはサフルディの有機農業グループで若手の代表格としてエディさんと共に積極的に活動しています。



玉ネギ畑と先進国に木が輸出されてしまった山々

エリさんの集落には診療所があり看護師が1人だけ月～土曜までいます。薬を買ったり、避妊の注射を打ってもらえるそうですが、高いため限られた村人しか買えません。下痢、熱病、喘息、虫歯（特に女性と子供）等が多い病気です。また、不衛生な環境や薬不足、栄養失調のため乳幼児死亡率も高いです。

エリさんは、3児（11才と5才の女の子、7才の男の子）のお母さん。家事、子育て、農作業に忙しい毎日です。サトウキビから作る黒砂糖や唐辛子を売り現金収入を得ています。その他にはポシヤンドウという5歳以下の乳幼児健診を毎月1回行う活動に10年間ボランティアとして関わっています。



煮詰めた黒砂糖を型に入れ固める

<滞在家中>

的野草さん・慶子さん宅（神戸市垂水区）

短期間の受け入れでは、ビルマのカイン・ソーさん（96年度）とタイのブンシーさん（00年度）をお世話い

ただいたことがありましたが、長期では初めての的野さん。自転車ツーリングが趣味なので、エリさんも現在特訓中。明石まで3人でツーリングするのが目標です。



1ヶ月一緒に暮らしてみた的野お母さんの感想は、「お皿洗いやお風呂の時に水をとても大切に使うなど、何でも物に対する接し方が優しいのが印象的。忘れていたことを思い出させてもらいました」。お父さんも「エリさんが家にいると挨拶をしたり、食べ物のことを改めて考える機会が増えたことがとてもいい」そうです。

ケンターウェさん

（ビルマ、女性、22才、仏教）

前述のとおり、パスポートの取得に約10ヵ月もかかり来日が遅れています。早ければ6月中旬頃に在留資格認定証明書が入国管理局から発行され、それをケンターウェさんに送り、日本大使館でビザが取れ、来日の日程が決まる、こととなります。

次号では、皆さんにケンターウェさんを紹介できるのを楽しみにしています。

（納堂邦弘）

寄稿：レルさんへの追悼文

レルさんが死んだ。病気だという。信じられない。あんなに頑強な人が…。まだ40才過ぎだというのに。

私たちが、外国から「研修生」を、家族の一員として受け入れたのはじめての人がレル・サバさん。13年前。四季折々来訪、延べ40日余り。春、当時幼稚園のちえ（17）が「ちえ先生」と日本語の勉強。夏、日本海に家族で海水浴に行くが「これ、海ちがう」。秋、村の日役（共同作業）に共に出、年寄り酒を飲みかわす。冬、朝起きたら一面真っ白にびっくり、ヨキ

（斧）をかついで雪道を炭焼き。〈中略〉帰国に際しての「日本、田畑、年寄りだけ。若い人レストラン、レストラン。日本滅びる」のことはわすれられない。

レルさん、あーす農場の6人の子ども、青年たち、自給自足、自立の百姓にむかって元気です。天から優しく暖かく見守ってやって下さい。では近いうちにお会いしましょう。

一子ども・青年と地球の明日を考える
“あーす農場” 大森昌也一
（兵庫県和田山町）

フォローアップ レポート ネパール 2003.4

4月25日、眼下に見なれた風景が広がり、新しくなったポカラ空港に着きました。5度目のネパール訪問です。空港にはラダさん夫妻とサビトリ・Bさんが花束を持って満面の笑顔で迎えてくれました。

ラダさんは、帰国後20年近く、地域女性のために編物教室（初期には識字教室も）を続けております。今回は、昨年より役所の認可を受け、新たに洋裁教室も開きましたので、その手伝いのために伺いました。

翌日は、朝から洋裁を始めました。ネパールは、1日に2度の食事（殆どの家庭で朝食9時頃、夕食8時半～9時頃）ですので、10時からです。旧知の人、新しい人、十数人の生徒さん達で大賑わい、部屋の中では狭く、中庭にテントを張り、その下での勉強ですが、雨期前でもあり、時には激しい夕立があり、その時は部屋の中で肩を寄せ合

4月25日から5月3日の日程でネパール、ポカラに帰った研修生を訪ねました。ポカラにはラダ・バンストーラさん（83年度）、サビトリ・シュレスタさん（97年度、以下サビトリ・S）、サビトリ・バスターラさん（98年度、以下サビトリ・B）が生活しています。それぞれ日本では洋裁、保健衛生を研修し、帰国後はラダさんを中心に地域の女性たちに編み物、洋裁を指導しています。PHDの交流会などでウールのセーターを見かけたことはありませんか。それを作っている女性たちです。洋裁の指導者である岩佐康子さんに同行していただき、洋裁指導を行いました。「次は私よ！」とみんなからひっぱりだこだった「グル・アマ（女先生）」からの報告です。

い、晴れると又、外へと和気あいあいの日でした。

最初の日、全員が手提げ袋を作り、その後、ブラウス、スラックス、ワンピース、ポーチバッグと完成するたびに褒めあって大喜びです。連日10時から夕刻の5時迄、最後の日は、7時頃迄頑張り、ポカラを発つ日も、早朝2時間程する熱心さでした。

「ポカラの研修生を訪ねて」

岩佐康子さん（兵庫県姫路市）



編物も従来の毛糸に加え、新たに絹の編糸が手に入るようになり、日本の方々に見ていただきたいとラダさんと一部の生徒さんでマフラーや帽子を一所懸命に編んでくれました。

私達の帰国の日が近づくと、皆が「グル・アマ、今度何時来てくれるの？」と云い、「2～3年後に…」と答えると、「きつと、きつとね。それ迄にうんと上手になっているからね」と少しのネパール語と身振り手振りでも心は通い合い楽しい日々を過ごさせて頂きました。

僅かな日々では、深く知ることもできませんが、ポカラの街も新しい建物、商店、自動車、オートバイが急速に増え、政府に抗議のためのストライキがあり、目に見える所、見えない所で変わっていく様子です。ネパールの皆さんが平穏に過ぎられるようにと祈りつつ旅を終えました。

一番先輩で約20年間、活動を続けているラダさん。「現在、編み物と洋裁で12人が通ってきています。土曜日を休みとし、それ以外の11時から2時まで教室を開いています、それぞれ自分のペースで来るので、時間は決まっていらないようなもの」と笑っていました。活動をしながら、お嫁さんと共に家事と3歳の孫の世話をする忙しい生活を送っています。

私たちのネパール行きが決定した直後、サビトリ・Sさんから3カ月の予定で来日したという連絡が入りました。京都の児童施設でボランティアをしている彼女を訪ねました。勉強熱心で活発な彼女は「ポカラで活動をしていきたいが今の自分のネパールでの現状と、こんな活動がし

たいと思いつく理想がかけ離れている。PHDで研修したことを活かし活動をしていくためのモチベーションを保ち続けることは難しい。モチベーションを保つためのよい刺激が欲しい。そのために来日しました」とのこと。ネパール出発の前日「暑いから気を付けて」と電話をくれました。

サビトリ・Bさんは1年前に結婚し、ポカラから車で30分行った村で生活しています。お連れ合いが農業をしているので、家事と農作業の手伝いで忙しい毎日を送っています。結婚して1年経ったばかりで「まだ村の生活に慣れない。洋裁の指導をしたいが今のところ余裕がない。農閑期に洋裁指導を始めたいと思っています」とのこと。

それぞれが家族やまわりの人との関係の中で、同じ目標を持った仲間と励まし合いながら生活に沿った活動をしていけるか。例えば家事と子育てをしながら活動を続けてきたラダさんは、ラダさんの努力と岩佐さんの励ましがあったこと。PHDは“物・お金によらない関係”、“共に生きる”ことを掲げてきました。研修生とどのような関係が築けるのか、研修生の実情を理解し、お互いに刺激を与え合える仲間になれるだろうか。研修生と会話を重ねていくことの大切さを感じました。（古本妃留美）

*サビトリ・Sさんは5月18日に帰国しました。

帰国研修生短 信 (その2)

帰国した研修生からレポートや手紙が届いています。

サンバ・カヤスタさん

(ネパール・83年度)

村での出産は大変なので、ポランティアの産婆が出産に立ちあいます。その時に、母子健康についての教育をします。また、週に1回母子の健康をチェックし、アドバイスします。女性たちが、編物ができると良いのではないかと思います、娘が編物の指導を10の村で50人を対象にしています。セーター、帽子、靴下、バッグなどの作り方を学び、村の女性たちは頑張っています。私は、いろいろな病気になるなりしてあまり体調が良くないので、仕事を息子に教え、村で活動してもらっています。

ハリエオ・ゲオバさん

(パプア・ニューギニア・97年度)

今までは、ひとつの畑で同じものばかりを作っていました。01年に、私は輪作をすることを8つの村の人の畑で説明しました。例えば、今は

イモを植えているけれど、その次は他の野菜、その次は陸稲と違うものを順に作っていくやりかたです。

お米は自給用や販売用に作っています。JICAの協力を得た地方政府は、自給率向上のために小さな精米機を1台持っています。米の専門家の役人が一人いて、私は彼と一緒に働いています。私は機械のオペレーターとして働いています。

農業グループを作るために話し合いを始めました。米の専門家と私は稲作農家の人たちを集め、グループの作り方や何をすべきかを彼らに話しました。そして、高校や職業訓練校のあるフィンチャーフェン地区で米を売る方法を探しています。これから5年くらいかけて、米の生産形態を改善するためにもっと努力したいと思います。

スウェウィンさん

(ビルマ・02年度)

村に帰ってからすぐに田植えをしました。夜にはケンターウェさんに日本語を

教えたり、村に人たちに日本でのことを話したりしました。アイガモを1000羽買って、田んぼの中に入れてみたが、まだ小さい時に雨がたくさん降って、300羽くらいは死んでしまいました。ちょっと心配です。でも、隣の農家の人もアイガモ農法に少し興味をもってくれたようなので、うれしいです。

ノバドン・カヨムドツさん

(タイ・00年度)

家の農業を手伝いながら、村から35kmくらいのところにある砂糖を作っている会社で電気系統の修理仕事をしています。5月4日に結婚をしました。



ノバドンさんの結婚式の様子

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

2003年2月	112件	1,597,774円
3月	123件	2,874,305円
4月	75件	850,139円
	310件	5,322,218円

以上の通り、多くの皆様よりご浄財を頂戴しました。厚くお礼申し上げます。今年度も会費のお願いの時期がやってまいりました。皆様よりの一層のお力をお願いいたします。

◆特定公益増進法人

継続認定を受けました。

PHD協会へのご寄附に免税上の特典を与える特定公益増進法人（以下、特増法人）の資格継続について、2003年5月7日から2年の期間で兵庫県より認定を受けることができました。同年1月14日の前回認定終了時に合わせ、継続認定の準備を進めてきましたが、その期限に間に合わず、

ご支援いただいている皆様にはご心配とご迷惑をおかけいたしました。お詫びを申し上げますとともに、今後とも引き続きのご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

◆PHD協会の理事が交代しました

5月9日開催の第52回理事会において、理事の山田一成氏が辞任し、代わって西田裕氏が就任いたしました。

◆林業体験合宿

“下草刈り”参加者募集！

今年も、大山振興会とPHD協会の主催、兵庫県篠山林業事務所とウータン・森と生活を考える会の協力により、7月5日、6日に第13期“下草刈り”を行います。篠山市大山地区で下草刈り作業をしたり、日本や海外の林業の現状を学ぶことから自らの生活を振り返ってみませんか。21期研修生も参加しますので、是非

ご参加下さい。

◆第8期国内研修生募集

国内でも平和と健康を担う人材を育成しようと95年から実施している国内研修生制度。今年も1名募集します。詳しい募集要綱をお送りしますので、お問合せ下さい。

- 内容：PHD協会の事業を通じた実地研修。
- 1) 海外研修生の研修業務を軸とする実践
 - 2) 国際理解・開発教育など国内に向けた啓発活動
 - 3) 公益法人における組織運営
- 対象：日本国内居住者、日本語でのやりとりが可能で、将来、開発協力・教育・福祉などの分野で働くことを志す方。当会事務所に通勤可能な方。
- 研修日程：週3～5日（10月から6ヵ月間）、3月にフィリピンでの地域の組織化についての研修有。
- 時間：原則午前9時～午後6時。
- 支給経費：研修手当及び交通費。
- 選考：書類審査後、筆記・面接。
- 締め切り：9月5日必着

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。

○月×日のPHD協会

職員 納堂 虫歯になった親知らずを思いきって抜く。その跡の穴にいろんなモノがハマって、不便。研修生の虫歯学習の重要性を再認識。

職員 古本 初めてのネパール。毎日2食、おかずは日本でいうカレーのスパイスで味付けした野菜や肉。ワラビのカレー風味にはびっくり。

職員 佐々木 一時期のウコン茶から最近では黒酢に転向。心なしか身体がやわらかくなってきたそう。その確認の前屈は腹がつかえてできず。

職員 藤野 十数度目のネパール。カトマンズの宿でソバを食べる。オーナーがコレステロール対策にとコックに作らせたのが始まり。いける。

職員 芳田 野菜作りに目覚める。プランター6個に、生ゴミ施肥。まもなく菜っ葉の初収穫。たぶん次はビールのあての枝豆に違いない。

職員 寺田 無性にケーキが食べたくなり、念じていたら、翌日の婦人会会合でごちそうに。もっとスケール大きくこの力が使えれば…。

以上、就寝時間が遅い順。

書き損じハガキ等報告 (2003年2月～4月集計)

書き損じおよび未使用ハガキ	4,492枚	200,140円
未使用テレホンカード	14枚	9,200円
使用済みプリペイドカードおよび使用済切手		0円
未使用切手		39,051円
合計		248,391円
02年4月～03年3月までの累計		641,684円
03年4月～		31,721円

ロータスクーポン・グリーンスタンプ・ブルーチップ 協力者ご芳名 (敬称略)
2003年2月1日～4月30日

<大阪府>

友洲小学校PTA成人教育委員会

<兵庫県>

明石北高等学校生徒会

自由ヶ丘小学校PTA研修委員会

食べものと暮らしをみなおす会

三 林 寿 子



PHD会員制度のご案内

終身維持会員: 1口10万円 (任意の口数)
PHD会員 : 年額 1口5千円 (任意の口数)
友の会会員 : 年額 1口千円以上任意の額

ご寄附に対する免税の特典

当法人は特定公益増進法人としての認定を得ていますので、ご寄附に対する下記のような特典があります。

寄附者が個人の場合

寄附金合計額 (所得金額の25%未満) マイナス1万円が寄附金控除額 (所得総額から控除できる額) となります。
(例) 1000万円の所得の人が250万円を寄附されると249万円の寄附金控除。

寄附者が法人の場合

寄附金合計額が一般寄附損金算入限度額の2倍未満までが損金扱いとなります。
(例) 資本金10億で、その年の所得が3億円で1年決算の会社の寄附金の損金算入額は1000万円未満まで (一般では500万円)。

郵便振替口座

01110-6-29688
財団法人ピー・エイチ・ディー協会